

朔東は既に晩秋である。晩秋の風景を探してみた。十勝の畑の中に青い帽子を被った小さなサイロ状のものがあり、「にお」と呼ばれる。晩秋の十勝の代表的な風物詩である。もう一景は、この時期、十勝川に飛来する白鳥であろう。ゴルフ場の上を数羽が縦陣と為り、横行して十勝川を目指している。近隣の畑で餌をついばむ姿も目撃される。第 3 景としては、しししゃものすだれ干しかなと思ったが、探しに行く時間的余裕なく、割愛する。七竈も良い。

第一景

十勝はお菓子大国でもある。帯広市内のデパートではお菓子フェスティバルが開催されて、連日賑わっている。お菓子大国を支えているのが、やはり豆か。十勝の豆の素晴らしさは、全国に膾炙されている。

この時期、十勝の豆を否が応でも認識させられる晩秋の風物詩がある。それが、「にお」である。「にお」と云うのは、刈り取った豆を交差させて積み上げた小さなサイロを思わせる形をしたものである。これは、豆を天日で乾燥させて殻から豆を外しやすくする為のものである。約 2 週間天日干しする。

天日干しのものが味も風味も一味違うとか云う人も居るのだが、そこまでの舌感を残念ながら持ち合わせない。日本人の「食」に関する雅趣に感嘆する。「にお」というのは、刈り取った稲を積み上げて天日干しする東北地方の「にゅう」に由来すると言われる。入鳥と書いて「にお」と読む。

何故か、頭に被せてあるシートは殆どが青い。殆どというのは例外もあると云う事であり、オレンジもあった。におの数を数えるとその畑の収穫量を推定出来る。一山〇十万なのだろうなどと下衆の勘繰りは止めよう。晩秋の朔東の風物詩として、単純に楽しみたい。当地を訪れる親戚・縁者等にも『格好が面白い』と好評である。



(にお)



(餌をついばむ白鳥)

第二景

晩秋の十勝、冬将軍の到来を予感させるものが「大白鳥」であろう。毎年 10 月下旬から 4 月下旬まで、1000 羽を越える白鳥が通称白鳥大橋の袂に大挙飛来する。この地に白鳥が大挙飛来するようになったのは、十勝川温泉の関係者の 15 年に亘る努力があったのである。それ以前においては、利別川やその周辺に飛来していたものを時間を掛けて餌付けをして、今日では、白鳥達が安心して冬を越す事が出来る桃源郷となり、十勝川温泉も白鳥の飛来する世界に二箇所しかないと言われるモール温泉と相まって、白鳥と共存する十勝屈指の観光地となったのである。当時の方の慧眼に脱帽だ。既に十勝川には第一陣の先発隊が飛来して受け入れ態勢を整えつつあるのだろうか。近くのゴルフ場でも白鳥の鳴き声

を聞く事が出来るし、単従陣で上空を飛ぶ姿を見る事が出来る。

第3景は何だろうか。熟慮の結果、葉のすっかり落ちた七竈の赤い実だろうと考えるに至った。赤い実の上に純白の雪のちょこんと乗っている様は北海道ならではの風景である。